旅の果てに見るものは

――《春と修羅　第二集》三陸旅行詩群考――

木村東吉

一　はじめに

一九二五年一月五日から九日まで、宮澤賢治は三陸海岸の旅に出たらしい。この旅に関する作品と創作メモに、次の三種のものがある。『春と修羅　第二集』（以下、『校本　宮澤賢治全集』のテキストを『第二集』、作者の構想を《第二集》と記す）収録作品には、三三八番「異途への出発」（一九二五、一、五）三四三番「暁穹への嫉妬」（一九二五、一、六）三四八番「水平線と夕日を浴びた雲」（一九二五、一、七）三五一番「発動機船［断片］」（一九二五、一、八）三五六番「旅程幻想」（一九二五、一、八）三五八番「峠」（一九二五、一、九）がある。『春と修羅　詩稿補遺』（以下、『詩稿補遺』と記す）収録作品には、「発動機船　一」「発動機船　第二」「発動機船　三」がある。創作メモには、『文語詩篇ノート』の一九二五年の項に「一月　九戸旅行／安家　寒き宿の娘、云々」とある。

前年八月十日・十一日の両日、賢治は花巻農学校において劇を上演し、これが岡田良平文部大臣の八月七日の地方長官会議における学校劇禁止の訓示を無視した形になった。このため、文部省の方針が次官通達の形で行政化された九月以降、作品に動揺の跡が著しい。[1] 花巻農学校における演劇教育を一人で推進していた立場上、緊張を強いられたためと思われる。この三陸旅行を経た後、一九二五年四月には辞意をもらし、[2] 実際にも、翌年は教職を辞して羅須地人教会の活動に踏みだしている。真冬の三陸旅行は、賢治がこうした悩みを抱え、新しい方向への決意を固めようとしていた時期のものであった。

ところで、筆者は《第二集》の成立過程に関して、次のような仮説を考えている。《第二集》は三度にわたって編集し直されたとされているが、それは同一作品に三種の清書稿があるものが多数あることでも確認される。したがって、この点を逆に考えると、定稿を三次清書稿とし、赤罫用紙稿で二つの清書稿があるものを一次・二次の清書稿に、黄罫22系用紙稿を二次

清書稿の補遺・補正稿とすると詩集の各段階の骨格が浮かびあがってくる。赤罫用紙の清書稿が一つだけの作品と、最初の清書稿の前に先駆的草稿がある作品については、傍証資料から前者を一次清書稿、後者を二次清書稿段階の追加稿と位置づけられる（この原則にしたがって、他の草稿的詩稿も次の清書稿の直前に位置づける）。このうえで、他の詩形に移行した作品と《第二集》との関係を個々に確認すれば、詩集の三段階の輪郭がほぼ捉えられる。さらに『第二集』作品を素材から見た場合、旅に取材した詩群と生活に取材した詩群が交互に組み合わされ、詩群が詩集の構成単位になっている。[3]

こうした仮説の正否は、各段階の詩集構成（詩群配列）の意味、詩群内部の有機的構成、作品解釈とそれぞれの有機的展開・改稿の必然性がどこまで確認できるかによって決まる。この中で、詩集構成とその展開の問題は個々の詩群について検討した後、改めて詩群配列を見直すほかない。したがって、まずは個々の詩群と作品について検討を急ぐ必要がある。本稿もその作業の一環に他ならない。[4] 本稿はこの仮説に基づき、またこれを補完するために、三陸旅行詩群を取りあげ、この詩群内部に有機的関係があることを確認する。[5]

二　三陸旅行における作者の足取り

最初に《第二集》作品成立の背後を確認し、作者の創作方法を割り出すために、作品や創作構想メモに基づいて、作者がたどったおよその道筋を確認しておく。

「異途への出発」下書稿（一）の第一形態に、「みんなに義理を缺いてまで旅に出るといっても／海岸の荒んだ野原や／渦巻く雪にさらされるばかりなのだ」とある。旅の大体のコースは、最初から作者の念頭にあったのだろう。旅の出発点である「月の惑みと／巨きな雪の盤とのなかに／はかなくひとり下りたてば」とある場所は、花巻農学校の校門付近を想定できる。目前に「アカシヤの黒い列」が捉えられ、手入形には「グラウンドの雪いちめんに」とあるからである。小沢俊郎氏は、汽車から下りた場所と解釈し、場所を特定できないとする。[6] しかし、当時さほど一般的ではなかったアカシヤがグラウンドの周辺にある場所を、三陸海岸への道筋の列車駅（花巻、盛岡、沼宮内、奥中山、尻内）周辺に想定することは難しい。「下りたてば」を汽車から下り立つことと限定する必要はなく、微温的な学校社会から、凍てつく農民社会の地平に下り立つことこそ、「異途への出発」の真意でもある。

「月の惑み」と描かれたこの日の月は、旧暦一二月一一日月齢一〇・〇。[7] 月の出は一三時一五分であった。月明りの中の出発で、翌日海岸にたどり着けるコースは、二一時五九分花巻駅発の夜行列車に乗れば、翌日二時二七分尻内（現八戸駅）着。ここから前年一一月に開通したばかりの八戸線四時五〇分発の始発列車に乗り換えると、種市に六時五分に着いた。[8] ここから久慈への道は海岸線に沿った道をたどる。一月六日の八戸港の日の出の時刻は六時五八分（一九九四年の場合）この日の天候は、宮古測候所の

データで終日快晴。前日小雪が降っていた。『天文年鑑』によると、一九二五年一月の土星の等級はプラス〇・八、中央標準時の南中時は七時四二分。「曉穹への嫉妬」における「薔薇輝石や雪のエッセンスを集めて／その清麗なサファイア風の惑星を／溶かさうとするあけがたのそら」は、そっくり作者の眼前に確かにあった。

ここから、作者の足取りはいくらか曖昧になる。しかし、三四八番の「水平線と夕陽を浴びた雲」に描かれたように、一月七日の夕方までに発動機船に乗っているためには、六日の宿が安家でなくてはならない。八戸と久慈の間には、馬車のほかに「奥南新報」の同年一月一日の広告によれば、阿部旅館が運営していた乗り合い自動車があり、同年四月号の「鉄道省運輸局編纂　汽車時間表」の付録によれば、一日二往復していた。八戸発は午前一〇時と午後一時、所要時間は三時間三〇分とある。途中から便乗すれば、午後一時三〇分には久慈に着けた。久慈から安家まで三〇キロに満たない海岸の道を、小袖浜から峠を越えて徒歩でたどったとしても、旅程に無理はない。安家には、小野芳夫氏が営む釣り宿が一軒だけあった。

当時三陸の港々には、漁船としての発動機船があったが、[9] 漁協関係者の証言によれば、久慈の小袖浜から便船がでることはなく、海運は安家（あっか）、堀内（ほりない）、大田名部（おおたなべ）が炭と塩の積み出し港として盛んであったという。作者が安家に宿を求めたのも、おそらくこうした理由による。また、土地の人の証言によれば、羅賀からは樽詰めの蛸が積み出されたという。「発動機船　第二」で「鉛いろした樽」が積み込まれる様が描かれ、「発動機船　三」に「青じろい章魚をいっぱい盛った／樽の間につっ立って」と描かれていることを裏づけている。

一月七日、作者が便船に乗った港がどこかを確定することはできないが、安家、堀内、大田名部のいずれかから乗ったとすれば、宮古までの道筋は時間的にも、「水平線と夕陽を浴びた雲」や「発動機船」四作に描かれた情景とも符合する。[10] 安家と堀内は隣り合わせの集落であり、大田名部までは一〇キロに満たない。大田名部の弁天漁港（通称ネダリ浜）では、「発動機船　二」に「雑木の崖のふもとから／わずかな砂のなぎさをふんで／石炭岩の岩礁へ」とある通りの情景が見られる。冬の日、この入江の浜に立てば、西側の崖が迫って高いため、午後二時前で、「日はもう崖のいちばん上で／大きな櫂の梢に沈み」という状態になる。実景を知らずに作品を見ると、つづいて「波があやしい紺碧になって／沖はいちめんまっ白で」とあるため、夕方の空と昼の海とが混同した表現かと思われて解釈に苦しむが、表現通りの情景が事実ある。ただ、ネダリ浜の白壁とよばれる岩礁には白い岩がでているが、この石は宮古の浄土ガ浜の石と同質のもので、石英粗面岩だという。[11] 石炭岩ではないが、これは作者も承知の上での虚構だった可能性もある。消しゴムで抹消された「水平線と夕陽を浴びた雲」に「まっしろな珪（ママ）の」といった文字が消え残っているからである。[12] 石炭岩の多い地帯だが白い岩礁のみえる港は付近で他に無い。

発動汽船の速度を六ノットと見積もれば、陸上約六十キロの距離は時間にして約五時間。午後から夜への航路で十分宮古に着ける。したがって、

「発動機船　第二」も「さっき一点赤いあかりをあげてゐた」という時間帯のもので、すでに高く上がっていた「月あかり」（中央標準時の南中時は午後九時四十七分）に照らされる海も、北国の冬の早い夜の崖陰のそれである。「発動機船　三」で宮古に着いた時は、夜になっていたわけだが、作者の半日の旅程に時間的な無理はない。

一月八日の日付を持つ三五一番「発動機船［断片］」では、「アンデルセンの月夜の海」を捉えている（月の入りは中央標準時で午前四時五十七分）[13]ので、この日も作者は船に乗っているが、同日の作品に陸上の旅に取材する「旅程幻想」もあって、この日は釜石の叔父の家に泊まっている（「峠」による）。したがって、三五一番の「発動機船［断片］」は、早朝の海であったと推定される。宮古港より深夜〇時に出発した三陸汽船（『ポケット旅行案内』第十一巻六号による）に乗れば、山田港・大槌港・釜石港に寄港していた。上陸地点を特定できる資料が今無いが、山田港から釜石まで約三〇キロ、大槌港からなら一五キロ弱であるから、どちらで船を降りても徒歩の旅は可能である。なぜ釜石まで乗船しなかったのか現在からすれば不審だが、ボロ船で当時利用者の不満も高かった三陸汽船だったから、何かの事情によるのであろう。「旅程幻想」は徒歩旅行を踏まえたものになっている。なお、『校本全集』校異では、『詩稿補遺』の「発動機船」三篇を『第二集』の「発動機船［断片］」の発展形とするが、取材の場所も異なり、その順序も『第二集』の「発動機船」が最後に位置する。

一月九日は田中鉱山線を利用しての列車の旅である。列車は鈴子駅をちょうど八時と一一時一三分に出発した。前者であれば、仙人峠の東側の大橋駅に八時五五分につく。ここから徒歩で仙人峠を越え、遠野側の岩手軽便鉄道仙人峠駅から一二時三五分発の列車に乗り、花巻に帰ることになる。遅い列車を利用すれば、大橋駅一二時一九分着、仙人峠駅一五時五五分発となる。前者であれば山頂が一〇時頃、後者であれば山頂が午後一時半頃ということになろう。この日は天気が良く、どちらとも特定できない。ただ、作品に強い風が描かれている点からすれば、午前中の可能性が強いだろうか。

三　『第二集』と『詩稿補遺』

この旅に取材した作品のうち、作者は《第二集》一次清書稿段階で、「異途への出発」「旅程幻想」「峠」だけを取り上げている。『校本全集』では「暁穹への嫉妬」「水平線と夕陽を浴びた雲」「発動機船［断片］」も併せ収録しているが、「水平線と夕陽を浴びた雲」は消しゴムで消されたノート稿、「発動機船［断片］」も抹消された断片稿である。[14] さらに「暁穹への嫉妬」は、二次清書稿段階の追加稿と推定される。この作品の下書稿（一）が草稿的で、筆跡・字体・文字の大きさ、鉛筆の色と太さ、その他全体の印象が一八一番「早池峰山頂」下書稿（二）三一四「夜の湿気と風がさびしくいりまじり」の下書稿（二）等と類似しており、『詩ノート』等の初期の草稿的詩稿群とは特徴を異にし、下書稿（一）が草稿になっている作品の場合は、一次清書稿手入形につけられている△印や㊀印を付し

た例がどの詩稿にも無く、生前発表もすべて一九三〇年以降だからである。

この詩群の一次清書稿段階の各詩稿には、いずれも強烈な自意識が滲んでいるのが特徴である。「異途への出発」では、月齢一〇・〇の月夜の出発に際して、第一形態で「がらんと額に臨んでゐる」「寒冷でまっくらな空虚」を捉えている。これは空間の暗さだけの問題ではなく、むしろ「みんなに義理を缺いてまで旅に出るといっても／海岸の荒さんだ野原や／渦巻く雪にさらされるばかりなのだから／じつはどうしていいかもわからないのだ」（下書稿一第一形態）という自覚と一体のものであろう。

「旅程幻想」では、「海蝕された山地の縁に沿ひ／いくつもの白い玢岩の峠を越えて／ここまで来たのだけれども／いまこの草地の銀のなかからかんがへて見ると／どうもしまひのひのきづくりの白い扉を／閉めなかったか／あるひは通らなかったらしい」（下書稿一）と、もはや取り返しのつかない自分の来し方を振り返り、「そこの光ってつめたいそら」を眼に思い浮かべている。

「峠」では、「あんまり眩ゆく山がまはりをうねるので／ここらはまるで何か光機の焦点のやう／蒼穹ばかり、いよいよ暗く陥ち込んでゐる」とする。「光機の焦点」に立つと自覚している詩人は、「暗く陥ち込んでゐる」蒼穹のうえから覗かれているような思いでいる。「暗く陥ち込んでゐる」蒼穹には、「異途への出発」の「寒冷でまっくらな空虚」と呼応するものがある。「二十世紀の太平洋が、／青くなまめきけむってゐる」（下書稿一手入形）のをみて、これから踏みだす一歩に意識的になっている。

見てきたように、この《第二集》の三陸旅行詩群には徒歩旅行の場面のみが収められ、船旅部分が削除してある。この詩群が旅に取材した心象スケッチではあっても、旅のスケッチでないことがここで明瞭になってくる。詩群として見た場合、北海道修学旅行に取材した詩群が、最終的に海辺の作品でまとめられていることも考慮すれば、意図された一種の虚構性が推定されてくる。[15] 詩群によって意図的に描き取られている世界と、作者の実際の旅との間に差があるという意味においてである。「水平線と夕陽を浴びた雲」と「発動機船［断片］」の抹消も、おそらく偶然ではない。

これらに対して『詩稿補遺』に収められた「発動機船」詩群は、船旅だけでまとめられている。作品を記した用紙がいずれも一度使用済みのものであるから、後からの追加的作品らしいが、詩句の質にも異なるものがある。モティーフでも、「発動機船」三作には作者の社会的関心が強く反映している点に特色がある。「発動機船　一」では、「うつくしい素足に／長い裳裾をひるがへし／この一月のまっ最中／つめたい瑯玕の浪を踏み／冴え冴えとしてわらひながら／こもごも白い割木をしょって／発動機船の甲板につむ／頬のあかるいむすめたち」の背景にも、「あの恐ろしいひでりのあと／みのらなかった高原」があることを捉えている。「発動機船　第二」では、崖上の望楼に向かってラッパを吹く船長と、伝馬で「鉛いろした樽」の船荷を積み込んでくる人々の緊密な関係に目を凝らしている。「発動機船　三」では、運んできた船荷の取り引きをするために身構える船長を描いている。同じ旅行に素材を求めた作品であるが、《第二集》の

詩群が作者の自意識の心象スケッチなら、『詩稿補遺』のそれは社会的関心によるスケッチと言ってよい。作品番号と創作日付の有無の背景には、《第三集》の場合と同様、やはり作品のモティーフの差が関わっている。[16]

四　一次清書稿段階の詩群

このように選別されている作品群のうち、問題を《第二集》の一次清書稿段階に限って見ていくと、三篇は個々に独立しながら相互の有機的関連を持っている。次にこの点について見ていきたい。三作品の一次清書稿をまとめて引用する。やがて二次清書稿段階の構造と比較するためでもある。

三三八　異途への出発　（一九二五、一、五）

月の惑みと／巨きな雪の盤とのなかに／あてなくひとり下り立てば／あしもとは軋り／寒冷でまっくろな空虚は／がらんと額に臨んでゐる／　……楽手たちは蒼ざめて死に／　　嬰児は水いろのもやにうまれた……／グラウンドの雪いちめんに／たくさんのたくさんの尖った青い燐光が／そんなにせわしく浮沈すれば／わたくしはとめどなく汨がながれる／　……アカシヤの木の黒い列……／みんなに義理を缺いてまで、／気負んだ旅に出るといっても／結局荒さんだ海辺の原や／林の底の渦巻く雪に、／からだをいためて来るだけだから／ほんたうはもうどうしていいかわからない／　……底びかりする水品天の／　　ひとひら白い裂罅です……／雪がいっさううつくしくきらめいて／あくまでわたくしをかなしくする

〔下書稿（一）手入形〕

三五六　旅程幻想　（一九二五、一、八）

海蝕された山地の縁に沿ひ／いくつもの白い玢岩の峠を越えて／わたくしはここまで来たのだけれども／いまこの草地の銀のなかからかんがへて見ると／どうもしまひのひのきづくりの白い扉を／閉めなかったか／あるひは通らなかったらしい／そこのちいさなつめたいそらや／やどり木のある五本の栗の木も見える／雪雲はめぐり／みちに沿ふ枯木の柵は／みなまっ黒な影を落として／地平線まで続いてゐる

〔下書稿（一）第一形態〕

三五八　峠　（一九二五、一、九）

あんまり眩ゆく山がまはりをうねるので／ここらはまるで何か光機の焦点のやう／芒穹（あばぞら）ばかり、／いよいよ暗く陥ち込んでゐる、／（鉄鉱床のダイナマイトだ／　　いまのあやしい呟きは！）／冷たい風が、／せはしく西から襲ふので／白樺はみな、／ねぢれた枝を東のそらの海の光へ伸ばし／雪と露岩のけはしい二色の起伏のはてで／二十世紀の太平洋が、／青くなまめきけむってゐる／黒い岬のこっちには／釜石湾の一つぶ華奢なエメラルド／　　……そこでは叔父のこどもらが／　　みんなすくすくと育ってゐ

た……／あたらしい風が翔ければ／白樺の木は鋼のやうにりんりん
鳴らす　〔下書稿（一）手入形〕

「旅程幻想」では、△印を付した手入形を採用すべきだが、手入形には未完成な部分があるので、便宜的に第一形態を採用した。三作品のいずれも、《第二集》の中では比較的先行研究が多い作品だが、とりあえず筆者の立場からの解釈を概略述べておく。[17]

「異途への出発」では、あてどない孤独な冬の旅に「みんなに義理を缺いてまで／気負んだ旅に出る」としながら、出発に際して「とめどなく泪がながれる」と感傷的に歌う。この感傷の底にあるものは、詩人の引き裂かれる心であろう。「寒冷でまっくろな空虚」に直面した詩人に意識されるのは、「栗手たちは蒼ざめて死に／嬰児は水いろのもやにうまれた」ということである。作者の生活史に合わせて解釈すれば、花巻農学校の演劇教育が挫折し、オーケストラや農民劇の計画が芽生えていることを暗示したものとも理解されるが、こうした計画も、人が生きている限り、一つの夢が破れるとまた次のはかない夢をつむぐ。そうした人の心の営みによるものにすぎないことを、詩人は意識している。だからこそ、人の夢を映すかに見える「たくさんのたくさんの尖った青い燐光が／そんなにせわしく浮沈すれば／わたくしはとめどなく泪がながれる」のである。しかも、その夢が一つ消える度に、人は心を引き裂かれなければならない。「雪花石膏板」を二つに引き裂く「アカシヤの木の黒い列」は、このとき詩人に意識される。痛みに耐えかねて「みんなに義理を缺いてまで」冬の旅に出ようとしているわけだが、それも結局「からだをいためて来るだけ」とわかっている。詩人の心を映すかに見える「底びかりする水晶天の／ひとひら白い裂罅」のもとで、「雪がいっさいつくしきらめ」くことが、「あくまでわたくしをかなしくする」のも、そのために違いない。

「旅程幻想」では、二つの世界の境界線のような「海蝕された山地の縁に沿ひ／いくつもの白い玢岩の峠を越えて」来た自己の来し方を振り返りつつ、もはや引き返すすべもないことを確認し、また、目前には「みちに沿ふ枯木の柵は／みなまっ黒な影を落として／地平線まで続いてゐる」のを見ている。「しまひのひのきづくりの白い扉」とは、おそらく花巻農学校の玄関だろうが、閉めるべき扉を閉めないで来たとする詩人の自覚を確認することが、ここでは重要であろう。そこに「底びかりする水晶天」とも通じる、「ちいさなつめたいそらや／やどり木のある五本の栗の木も見える」と回顧的な言葉がつづく。けじめもつけられず来た過去、「白い扉」の場所がなつかしい。しかし、今そこはすでに遠くなり、詩人の周囲に「雪雲はめぐ」って、目前の「みちに沿ふ枯れ木の柵は／みなまっ黒な影を落して／地平線まで続いてゐる」という。前途もまた、引き裂かれた世界である。詩人の迷いはなお深い。

「旅程幻想」の翌日の「峠」で、「二十世紀の太平洋が、／青くなまめきけむってゐる」のを展望した詩人は、ようやく新しい一歩を踏み出そうと考える。まず「あんまり呟く山がまはりをうねる」という周囲の情景を、

詩人が「ここらはまるで何か光機の焦点のやう」と受け止めたことによって、「蒼穹」も「いよいよ暗く陥ち込んだ」光機の筒のように思われ、「鉄鉱床のダイナマイト」も何者かの「あやしい呟き」となっている。「光機の焦点」に立つという自覚を持って周囲を見れば、「白樺はみな、／ねじれた枝を東のそらの海の光へ伸ばし」ており、それに誘われて東方をみた詩人は、ここで「雪と露岩のけはしい二色の起伏のはて」に、「三十世紀の太平洋が、／青くなまめきけむってゐる」のを捉える。「釜石湾の一つぶ莽蒼エメラルド」が輝き、そのそばで「叔父のこどもらが／みんなすくすくと育ってゐた」ことも思い出され、「あたらしい風」に白樺が枝を「鋼のやうにりんりん鳴らす」のを聞く。詩人は、新しい勇気を得たに違いない。

このように見ると、三作品間に、旅の順序性だけでない有機的構成が認められてくる。「異途への出発」で「アカシヤの木の黒い列」を捉えると、「旅程幻想」では、「みちに沿ふ枯木の柵は／みなまっ黒な影を落として／地平線まで続いてゐる」とし、「峠」では、「雪と露岩のけはしい二色の起伏のはて」に「三十世紀の太平洋」を捉えている。つまり、この三篇の作品では、あえて精神分析学などを持ち出すまでもなく、いずれも詩人の心を引き裂くものとして白黒の対立する線を置き、詩人の展望の広がりとともにこれを拡大し、その果てにエメラルドの輝きを見出している。

また、「寒冷でまっくろな空虚」は、「栗手たちは蒼ざめて死に／嬰児は水いろのもやにうまれた」ことを想起させたが、「ちいさなつめたいそら」は「ひのきづくりの白い扉を／閉めなかったか／あるひは通らなかった」ことへのこだわりの中で想起されるものであり、最後に「いよいよ暗く陥ち込んでゐる」蒼穹は、詩人を「光機の焦点」に立っているという思いに追い詰めていく。詩人の内奥が次第に明るい光の中に引き出されていることからもわかるように、次第に強くなる光は詩人に決断を迫る働きをしている。

ところで、「異途への出発」と「峠」の一次清書稿手入形の欄外には㊗印がついているが、杉浦静氏は、これを一九二八三年夏頃の作品選択符号とし、㊗印を持つ四一編（△印と㊗印の両方を持つものも含む）によって一次の詩集が構想されていたとする。[18] これによれば、△印しかない「旅程幻想」は、この段階で選に漏れたことになる。筆者も、△印や㊗印を作品選択符号とすることに異存はないが、㊗印のある詩稿のみで一次の詩集が構想されたとする判断には根拠がないと考える。㊗印稿は尊重されているが二次清書稿に発展しないものがあり、無印稿や△印稿から二次清書稿に発展しているものが多数あって、無印稿と削除稿とは扱いが同じでない。[19] 氏の四一篇構想は、《第二集》の二次清書稿段階に引き継がれていない。にもかかわらず、二次清書稿の時期に相当する一九三一年頃の構想メモに「第二、自然」とあることから、氏はこの四一篇構想を自然のモティーフで統一しようとしたものとされている。不可解というほかはない。

筆者は㊗印稿を詩群構成の基準的作品という程の意味に解し、当面の三陸旅行詩群についても「旅程幻想」を含めて考えたい。「旅程幻想」を欠

いた文脈で「異途への出発」と「峠」が読まれるなら、作品群が著しくその奥行きを失うことを免れない。ここに筆者は三陸旅行詩群の有機的構成と記録性を超えた心象スケッチの方法を見出すのである。このように捉えてこそ、二次清書稿段階への展開の必然性が理解されてくる。

五　二次清書稿段階について

㉖印稿のうち、「峠」が二次清書稿段階に引き継がれていない。この理由は何であろうか。多分それは、作品中にある。作品をもう一度見直してみれば、峠を東から登ってきた詩人がこれからたどる道は、必然的に「冷たい風が、／せはしく西から襲ふ」のに逆らって西に向かうことになる。詩人のこれから進む方向を無視すれば、明るい展望を歌った作品とも読めるが、この点を考える限り、作品は回顧的で希望のないものとなる。仙人峠の西方、遠野側の道は谷が深く展望に欠けるのも事実だが、旅の終りをこの「峠」で結ぶわけにはいかない。この欠陥は、改稿によって簡単に補うことができない。

そこで二次清書稿段階で、「峠」と差し替える形で採用されているのが「暁穹への嫉妬」である。これは創作日付も作品番号も「旅程幻想」の前に位置するものである。この場合、詩群構成はどうなるのであろうか。この点を理解するには、二次清書稿段階の作品を見るのが早道である。二次清書稿の手入形から、三作品をまとめて引用する。

三三八　異途への出発　（一九二五、一、五）

（改稿がないので、冒頭八行略）尖った青い燐光が／いちめんそこらの雪を縫って／せわしく浮いたり沈んだり／しんしと風を集積する／　……ああアカシヤの黒い列……／みんなに義理をかいてまで／こんや旅だつこのみちも／じつはたゞしいものでなく／誰のためにもならないのだと／いままでにしろわかってゐて／それでどうにもならないのだ／　……底びかりする水晶天の／一ひら白い裂罅（ひび）のあと……／雪が一さうまたたいて／そこらを海よりさびしくする

〔下書稿（三）手入形〕

三四三　暁穹への嫉妬　（一九二五、一、六）

薔薇輝石や雪のエッセンスを集めて、／ひかりけだかくかゞやきながら／その清麗なサファイア風の惑星を／溶かさうとするあけがたのそら／さっきはみちは渚をつたひ／波もねむたくゆれてゐたとき／星はあやしく澄みわたり／過冷な天の水そこで／青い合図（wink）をいくたびいくつも投げてゐた／それなのにいも（ママ）／（ところがあいつはまん円なもんで／リングもあれば月も七つもってゐる／第一あんなもの生きてもゐないし／まあ行って見ろごそごそだぞ）と／草刈（ママ）云ったとしても／ぼくがあいつを恋するために／このうつくしいあけぞらを／変な顔して　見てゐることは変らない／変らないどこかそんなことなど云はれると／いよいよぼくはどうしてい、かわから

なくなる／……雪をかぶったはひびゃくしんと／　百の峠がいま明ける／　葛葉風の青海原よ……／滅びる鳥の種族のやうに／星はもいちどひるがへる

〔下書稿手入形〕

三五六　旅程幻想　（一九二五、一、八）

さびしい不漁と旱雪のあとを／海に沿ふ／いくつもの峠を越えたり／萱の野原を通ったりして／ひとりここまで来たのだけれども／いまこの荒れた河原の砂の、／うす陽のなかにまどろめば、／肩またせなのうら寒く／何か不安なこの感じは／たしかしまひの硅板岩の峠の上で／放牧用の木柵の／楢の扉を開けたま、／みちを急いだためらしく／そこの光ってつめたいそらや／やどり木のある栗の木なども眼にうかぶ／その川上の幾重の雲と／つめたい陽射しの格子のなかで／何か知らない巨きな鳥が／かすかにごろごろ鳴いてゐる

〔下書稿（二）最終形態〕

「異途への出発」の改稿は少ない。しかし、その中で、作中の詩人は、自分が「みんなに義理をかいてまで／こんや旅だつ」ような行為をしてしまう自分の「みち」を、客観的に見直せるところまで成長している。「じつはたゞしいものでなく／誰のためにもならないのだと／いままでにしろわかってゐて／それでどうにもならないのだ」と、自己分析している。こうした眼を獲得した詩人は、下書稿（二）の段階で、「みんなに義理を缺いてまで／気負んだ旅に出るといっても／結局荒さんだ海辺の原や／林の底に渦巻く雪に／からだをいためて来るだけだから／ほんとうはもうどうしていいかわからない」と、自己に執着していただけの青年ではもはやない。詩人が、自己を「たゞしいものでなく／誰のためにもならない」行為に駆り立てるものに自覚的である分だけ、作品が持つ情緒的衝撃性は薄らいでいる。

自己を客観視する詩人の姿勢は、「暁穹への嫉妬」にいたってより明確になる。ここに歌われているモティーフには、宗教と科学の問題も含まれているが、詩群が構成する文脈に沿ってこれを見れば、自己のうちなる衝動を客観的に捉え直しつつ、愛惜するものに別れ、引き裂かれる心を抱きながらも、新しい世界を受け入れようとしている。これは一次清書稿段階の「峠」がようやく捉えたモティーフであった。「釜石湾の一つぶ華奢なエメラルド」と「清麗なサファイア風の惑星」といった比喩は、象徴するものに差はありながら発想に連続するものがあり、「暁穹への嫉妬」が、海に展望を開いている点でも、「峠」に代わる作品としての要請を満たしている。「異途への出発」に「雪が一さうまたたいて／そこらを海よりさびしくする」（下書稿「手入形」）とあるのを、「暁穹への嫉妬」で「さっきみちは渚をつたひ／波もねむたくゆれてゐたとき」と受けて、両者の繋がりは緊密である。

そこで問題となるのは「旅程幻想」である。「峠」の前に置く作品と、「暁穹への嫉妬」の次に置かれる作品では、役割が違う。賢治作品では珍

しくないが、詩群中でこの作品の改稿が最大の飛躍を含んでいるのも、おそらくそのためであろう。下書稿（二）で「海に沿ふ／いくつもの峠を越えたり／萱の野原を通ったりして」孤独な道を歩いて来た詩人は、「暁穹への嫉妬」の渚の道の延長線上にある。しかも「さびしい不漁と旱害のあとを」といった冒頭の一行を加え、詩人の視野に広がりを持たせている。「異途への出発」の改稿で自己の周辺にも目配りができる詩人に成長した姿が、引き継がれている。そのうえで草原ではなく、「荒れた河原の砂」の上に視座を移して、「うす陽のなかにまどろむ」詩人の疲れは深い。想定される地図上の「旅程幻想」の位置は「峠」の手前だが、この詩人が歩いてきた心の中の道のりでは、「峠」のモティーフを越えた後であることをあたかも象徴するように、下書稿（一）では、詩人の前途に「まっ黒な影を落として／地平線まで続いて」いた枯れ木の柵が、下書稿（二）では「肩またせなのうら寒」い中で振り返るとき、「たしかしまひの硅板岩の峠の上で／放牧用の木柵の／横の扉を開けたま、／みちを急いだ」ところとして回想されるものとなっている。これは、農村社会の生活マナーを怠ったことへの詩人の悔恨でもある。[20]「異途への出発」において「みんなに義理をかいてまで」旅に出てきたモティーフを、生活者のマナーを怠ったという意味で引き継いでいる。下書稿（一）の「ひのきづくりの白い扉」は、幾らか豊かな生活をイメージさせたが、下書稿（二）の詩人は、そうしたものへの拘りを払拭している。

最後に、「そこの光ってつめたいそらや／やどり木のある栗の木なども眼にうかぶ」ために、思わず振り返る川上はすでに「幾重の雲」に覆われ、「つめたい陽射しの格子のなかで／何か知らない巨きな鳥が／かすかにごろごろ鳴いてゐる」という。この「荒れた河原の砂の」上で聞く、「かすかにごろごろ鳴いてゐる」「何か知らない巨きな鳥」の声とは何かといった疑問に対しては、下書稿（一）の抹消された部分に「とどろきを聴く」といった詩句があるから、雷鳴の比喩とするのが一応の解釈であろう。しかし、ここではむしろ雷鳴をあえて「何か知らない巨きな鳥」の声と表現し、化鳥のイメージを引き寄せることで、奇怪な幻想世界のただ中に読者が導かれて居ることを確かめることが重要ではあるまいか。これによって、詩人が佇んでいるこの不気味な生の深淵の意識世界に、読者もともに立つことができるからである。「旅程幻想」の題名の意図も、ここで了解される。「峠」を最後に置いた二次清書稿段階から、「旅程幻想」で締め括る二次清書稿段階への飛躍と屈折には、大きなものがある。一つの別れを決意した詩人が旅の果てに見たものは、ほとんど冥府にも近い世界であった。

一次清書稿がまとめられていたと推定されているのは一九二五年～一九二八年頃とされている。これから二次清書稿がまとめ直されたと推定される一九三〇年～一九三二年までの間には、作者の羅須地人協会の試みと病魔による挫折、そして一度は回復した後の再度の病臥があった。そうした詩人の閲歴があるいはここに投影しているのかもしれない。

六　おわりに

以上の考察を通して、二次清書稿段階までの三陸旅行詩群の有機的構成は確認できたと考える。また、飛躍の多い賢治詩の改稿過程において、その飛躍の必然性を解明する一つの手掛かりを得たという意味でも、詩群構成という捉え方は有効であろう。

しかし、《第二集》が最終的に志向していたところを確かめるためには、まだ前途に問題が山積している。三陸旅行詩群に限ってみても、最初に触れた通り、これには定稿詩稿用紙稿がない。これを削除とみるべきか、作者の死による作業の中断とみるべきか。大きな疑問が残る。この問題と関連して、「暁穹への嫉妬」の発展形に文語詩「敗れし少年の歌へる」がある。一般的にいえば、口語詩における観念的・思弁的作品が文語詩化される傾向は認められるが、これによって詩群が解体されたのかどうか、三陸旅行詩群の一例だけをもって判断することはできない。すべては三次清書稿（定稿）段階で、詩集全体の詩群構成とその配列がどのようになされているかといった視点から再検討すべきであろう。今後の課題としたい。

注1　山内修『宮沢賢治研究ノート』（河出書房新社　1991.9）拙稿「春と修羅第二集』『校本』とその背景」（『近代文学試論』30号　1992.12.）参照。

2　書簡番号205　一九二五年四月一三日付杉山芳松宛書簡参照。

3　詳細は拙稿「《春と修羅第二集》の構想論――二次清書稿段階を中心に――」（『国語と国文学』71巻12号　1994.12.）参照。推定の根拠について若干の補説をすれば次の通りである。

『校本全集』の校異おいて詩稿の第一形態を「鉛筆できれいに書かれたもの」あるいは「罫を用いて、鉛筆のやや崩した字体で書かれたもの」とする詩稿を清書稿とすると、《第二集》では、同一作品でこれを三種あるいはそれ以上の持つものが多数ある。また、主要なものだけで赤罫用紙稿　黄罫22系用紙稿　定稿用紙稿があり、このうち赤罫用紙稿段階だけで二種の清書稿を持つ作品が六五篇ある。最後の編集は定稿用紙稿であるから、赤罫用紙稿は初めの二度の編集に際しての清書稿、黄罫22系用紙稿には赤罫用紙稿を切り貼りしたものが多いから二次清書稿の補遺・補正に当たると推定される。赤罫用紙稿で一つの清書稿しか無い作品には、早い時期の生前発表がみられ、用紙の裏が他の作品の草稿に流用されているので一次清書稿とわかる。最初の清書稿より早い段階の下書稿（一）が草稿的に書かれている作品には、遅い時期の生前発表しかなく、一次清書稿手入形につけられている㊀印や△印を持つ詩稿が無いから、追加稿とわかる。

なお、この推定は、現在の通説である杉浦仮説（宮沢賢治――明滅する春と修羅――』（蒼丘書林 1993.1.）に抵触する。杉浦説は昭和三年頃構想されていた一次の《第二集》として、一次清書稿手入形に㊀印がある17篇と、㊀印と△印がある26篇を充てるというものである。

その数が、詩集の最後の作品の原稿の余白に記された計算式（16＋23＝39）の数値と近似するというのがその根拠である。㊗印や△印をある時期の作品選択符号と見ることには、筆者も依存がない。しかし、これに詩稿全体を位置づける見通しはなく、多数ある原稿の余白に計算式を記した例の中で、この数値を詩集全体の作品数の計算式とする根拠は無い。したがって、この式の数値が㊗印や△印を付した作品数を示すとしても、《第二集》の作品数がこれにだけに限定される理由はない。また、これによって選ばれた41篇が、必ずしも次の段階に継承されておらず、一次清書稿90篇、二次清書稿83篇とも開きが大きすぎる点にも疑問が残る。

4　拙稿「魂の修学旅行――《春と修羅第二集》修学旅行詩群考――」（『近代文学試論』32号　1994.12.）「時間の軸を遡ると――《春と修羅第二集》「鳥の遷移」考――」（『島根大学教育学部紀要・社会科学人文科学篇』28巻1994.12.）「美しい自然の背後にあるものは――《春と修羅第二集》［その洋傘だけでどうかなあ］考――」（『島大国文』23号　1995.3.）参照。

5　創作日付順で編集されている『第二集』では、二番から五二〇番までを配列した前半と、その後突然三二六番にかえって以後四〇三番までを繰り返している後半とに別れていて、その理由が謎となっている。これについて、天沢退二郎氏は、「『春と修羅』第一集から第二集へ――日付と作品番号をめぐって――」（『国文学・解釈と教材の研究』1994.4.）において前半と後半を合わせた番号順配列があり得たことに言及されている。筆者の作業はこれに一つの疑義を挟むことになろう。

6　小沢俊郎『宮沢賢治論集2　日語詩研究』（石精堂出版1987.4.）「義理を欠いてまで」の章参照。

7　拙稿「資料と考察　宮沢賢治『春と修羅第二集』創作日付の日の気象状況」（『島根大学教育学部紀要』第26巻（人文・社会科学編）1992.12.）参照。本稿の気象データは、すべてこれによる。なお、この調査に際しては、江刺家均氏、八戸市立図書館に多大なご協力を得た。ここに記してお礼申し上げる。

8　列車時刻表、現地聞き取り調査による。

9　大向直三『小袖部落の近代史』（自費出版　杜陵印刷　1978.10.）によれば、大正三年以後機械船ブームが起こり、黒崎に幸徳丸、大田名部に大正丸、堀内に浜幸丸、下安家に光徳丸があったと記している。なお、この調査に際しては、久慈市編纂室の高谷廻行氏から貴重なご教示を得た。ここに記してお礼申し上げる。

10　「発動機船　三」の末尾に「羅賀で乗ったその外套を通すなよ」とあることから、『校本　宮澤賢治全集』の年譜などでは、詩人が乗船した場所を羅賀と考えているふしがあるが、これに関わっては、「発動機船　第二」に「うしろの部下はいつか二人になってゐる」とある人物を指すと考えた方が妥当であろう。

11　山田勲『並代村史』（並代村　1984.1.）第七章61頁。

12 岩手県漁港協会『岩手の漁港』（『岩手の漁港』編集委員会 1985.2.）の航空写真のほか、地方の聞き取り調査による。注5の拙稿において、筆者は浄土ガ浜との関連を考えたが、冬季の現地調査の結果、本文のように訂正したい。

13 この日の月の入りの時間について、注5の資料では、五時五二分と記した。これは、水沢天文台からデータを頂いたものであるが、質問と解答に行き違いがあったため、九日の朝のデータを記していた。訂正したい。

14 注3の拙稿参照。

15 拙稿「魂の修学旅行――《春の修羅第二集》修学旅行詩群考――」（『近代文学試論』32号 1994.12.）参照。

16 拙稿「作品番号欠落過程と《春の修羅第三集》一九三二年構想」（『島根大学教育学部紀要』第27巻1号（人文・社会科学編）1993.12.）「《春と修羅第三集》一九三二年構想『生活・社会詩篇』試論」（『島大国文』22号 1994.3.）「《春と修羅第三集》一九三二年構想『田園詩篇』試論」（『島根大学教育学部紀要』第27巻2号（人文・社会科学編）1994.3.）参照。

17 この三陸旅行詩群全体を論じたものには注4の小沢論文のほか、山内修『宮沢賢治研究ノート――受苦と祈り――』（河出書房新社 1991.9.）がある。「旅程幻想」について論じているものは、伊藤信吉『近代文学鑑賞講座16 高村光太郎・宮沢賢治』（角川書店 1959.6.）および伊藤貞一郎「『旅程幻想』における宮沢賢治の旅」（『安田女子大国語国文論叢』11号 1982.9.）がある。

18 杉浦静『明滅する春と修羅』（岩手書林 1993.1.）参照。

19 削除稿は作品が次の段階に発展しないだけでなく、用紙の裏が他の詩稿の草稿的下書稿に使われたりする。

20 季節にもよるが、放牧地域の木柵と扉の管理には厳しい規範がある。

――きむら・とうきち、島根大学教授――